

NEWSLETTER

～ 目次 ～

- ◆ アクティブラーニングニュースレター (p.1)
- ◆ アクティブラーニングとは? (p.1)
- ◆ 「国際紛争ケースブックをつくろう」教員・SA・受講生インタビュー (p.1)
- ◆ ジグソー法を授業で活用する (p.3)

◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングはKALS（駒場アクティブラーニングスタジオ、東京大学駒場キャンパス17号館2階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングを取り入れる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。本ニュースレターをお読みになり、気になる記事がありましたら、アクティブラーニング部門までお問い合わせください。（星埜）

◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中で読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった視点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさ

まざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（星埜）

◆ 「国際紛争ケースブックをつくろう」
教員・SA・受講生インタビュー

全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習「国際紛争ケースブックをつくろう」では、国際紛争に関するケースブック（教材）を学生自身がつくるというアクティブラーニングが導入されています。導入のねらいや授業の様子について、担当教員である中村長史先生と、元受講生でその後スチューデントアシスタント（SA）を務めた八尾佳凜さん（教養学部・国際関係論4年生）に、お話を伺いました。



授業の概要と目的・到達目標

中澤 「国際紛争ケースブックをつくろう」とは、こういった授業なのでしょう。

中村 この授業は、学生自身が国際紛争ケースブックというものを作成することによって国際紛争について学ぶという授業です。複数の国際紛争の経緯や構図、原因等について調査・分析し、最終的にケースブックを作成します。その過程で、ある国際紛争に対する見方は決して一様ではないことに気づき、できる限り客観的に紛争を捉えるための方法を習得することを期待しています。

国際紛争ケースブックというのはちょっと聞きなじみがないものだと思いますけれども、法学部における判例や医学部における症例がたくさん載っている教材の国際紛争版といえばイメージが沸きやすいでしょうか。ただ、この授業では、そうした教材を学生自身がグループで作成するところに特徴があります。作っていく過程で紛争についていろいろなこ

とを調べたり考えたりするので、それが一番学びになるだろうということで、2020年度に全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習として初めて開講し、これまで3回開講してきました。

中澤 ケースブックを作った後は、どういうふうに活用するのでしょうか。

中村 活用法は大きく二つありまして、一つは自身が作成したケースブックや他のグループが作成したケースブックを他の授業での学習や卒論執筆の際に参照するというものです。

もう一つが、これはこの授業の大きな特徴かなと思いますけれども、次の年度のこの授業にケースブックを引き継いで、さらなる改善を次年度の受講生がやることとなります。例えば、今日お越しの八尾さんは2020年度にボスニア紛争についてケースブックを作ってくださいましたのですけれども、それを2021年度の受講生のグループが改善をかけて、さらに2022年度も改善をかけてという形で一八尾さんはそれをSAとして今度は見守っていらっしゃったのですけれども一学年を横断して引き継いでいきます。先輩が作ったもので学んで、さらにそれをより良くしていこうとするところが特徴かなと思います。

中澤 改善とは具体的にはどのようになされるのですか。情報が足されるとかでしょうか。

中村 大きくは二つありまして、一つはおっしゃるように情報が足されるということです。みんな頑張っているものを作ってくれていますけれども、紛争の多くは複雑ですし、紛争に関する資料や書籍、論文は膨大にあるので、限られた期間内では調べきれないものです。実は他にも参考にすべき文献があるということで、そうした文献に基づく情報を次の年度のグループが足してくれる例はよくみられます。

もう一つが、実は、情報を削るということです。みんな熱心に調べてくれて情報が盛りだくさんのケースブックが仕上がってくるのですけれども、ちょっとそれが難し過ぎて、その紛争のことをあまり知らない人が読むと何が何やらかえって分からなくなるみたいなことが起きがちです。ケースブックはあくまでも教材なので、これは成果物としては望ましくないものですから、先程とは逆に、情報を削ぎ落として整理するといった方向の改善をかけるグループもあります。これも大事な改善だと思います。

中澤 面白いですね。作ったケースブックの評価は教員だけではなく受講生相互にも行うのですか。

中村 大体いつも90分の授業の前半で、各グループ内でケースブック完成に向けたディスカッションをやるのですが、授業の後半ではグループ間のディスカッションをやりませう。大体毎学期4つ程のグループがあって異なる紛争を扱っているのです、他のグループの人と意見交換をする時間を設けています。

ねらいとしては、まず自分達のグループが担当してない紛争についても多少なりとも知ることができるというのは、知識が増えるという意味で単純によいことかなと。それから、その紛争についてはあまり知らない人達からのコメントによって、自分達がやっていることは細かいことに走り過ぎていて大局

的どころがつかみにくくなっているとか、先程言ったような改善のポイントに気付けることがあります。そういった効果を期待して、グループ間のディスカッションにも時間を割いているところです。

受講生としての感想

中澤 授業やケースブックについてだいぶ分かってきました。では、2020年度に受講生だった八尾さんに当時のことをお伺いしたいなと思います。当時どういった気付きとか学びがあったかを教えてください。

八尾 紛争について調べるとき、レポート等ですと、この主体がどうこうして…といった結構細かいことに注意が向きがちだと思います。もちろん、紛争ケースブックでもそういったところは大事ですが、それだけでなく、紛争の構造的要因と直接的要因とを分けて考えたり、他の紛争とのつながりについても考えたりといったマクロな視点を得ることができるというのは紛争ケースブックのいいところですね。

他方で、授業までに参考文献から学んだことをまとめておくことが授業中のグループワークの前提とされるので、負担としては決して軽くないし、その辺りは覚悟の上で履修するべきだとも感じました。

中澤 2020年度ということは、この授業の初年度に受講されているのですよね。先程の中村先生のお話に「引き継いで改善する」というのがありましたけれども、初年度だと引き継ぐものがないのかなと。新規作成の苦労や難しさはありましたか。

八尾 私の受講時は確かに初年度でしたが、元となるフォーマットは中村先生が既に作成してくださっていて、それを改訂するという形で進めました。そのため、完全にゼロの状態から始めたわけではなく、ケースブックをどういうふうにしたらいいのか分からないということはありませんでした。ただ、「ケースブックの改訂」を学期前半で済ませた後には「ケースブックの作成」という作業が始まります。改訂はプロトタイプがある分、どのくらいの分量で、どういった情報を盛り込むかということが分かりますが、新規作成は自分たちで最初から構成を考えなくてはならないので、やはり一味違った難しさがあるのではないかと思います。

【第1部: ケースブックづくりから学ぶこと】 第1回 ガイダンス	【第2-2部: ケースブックの作成】 第7回 紛争の防止策 第8回 作成作業① 第9回 作成作業② 第10回 作成作業③ 第11回 作成作業④ 第12回 作成作業報告会
【第2-1部: ケースブックの改訂】 第2回 紛争の原因 第3回 改訂作業① 第4回 改訂作業② 第5回 改訂作業③ 第6回 改訂作業報告会	【第3部: ケースブックづくりから学んだこと】 第13回 総括

本授業のスケジュール

元受講生が SA を務める意義と課題

中澤 ありがとうございます。では、そういった八尾さんのような、受講生だった学生が翌年度以降に SA を担当することの意義についてもお伺いしたいなと思います。

中村 今八尾さんの一連のお話を聞いていても改めて思ったのですが、元受講生だからこそ、学生がつまづきやすいところに気付きやすいのだろうなと思います。もちろん、僕も気を付けてグループワークを見ているつもりなのですが、年々自分が学生だったときの感覚が薄れていくということもあり、ケアしきれないところがどうしても出てきてしまいます。例えば、今年度も、もう自明のことだと思っていた文献の調べ方については割合軽く流してやっていたのですが、あるグループはその時点からちょっとつまづきかけていたところを八尾さんが素早く察知してくれるということがありました。そこで、僕と相談のうえで、こういう文献の調べ方がありますよと「SA からのお知らせ」という形で連絡してもらったりしました。そういったことができるのは、SA なのだけでも、学生だから学生目線も持っているがゆえですね。それはもちろん元受講生じゃなくても、SA であれば言えることではあるのですが、自分自身が前の年とか前の前の年に受けていたということで、より学生がつまづきやすいところが分かるのではないかなと。

それから、八尾さんのような元受講生で今 SA やっている方の姿を今の受講生が見て、自分もああいふふうな先輩になろうと頑張るといふ、ある種のロールモデルとしてほしいという思いもあります。

中澤 ありがとうございます。八尾さんは、受講生が SA になることについてどんな意義があると考えていますか。

八尾 ほとんど中村先生が言っていたことと同じなのですが、SA の立場からの利点を挙げれば、受講生の目線で見えていたことと SA の目線から見えることとは若干違っているもので、そういった意味で常に新しい学びを得られるということがあります。受講生の立場からは、SA が全く違う分野の人や、その授業についてあまり詳しくない人である場合よりも履修経験のある人のほうが相談しやすいという利点があるのではないのでしょうか。

中澤 ありがとうございます。今は受講生が SA をすることのメリットの面をお伺いしたのですが、ほかに何か困ったことや留意すべき点はありましたか。

八尾 困った点は特にありませんが、留意すべき点としては、自分に履修経験があるために、思い入れが強くなり過ぎるといふ部分があります。この授業はある程度学生の自律性を尊重する授業であり、あまり SA や先生が口出しをし過ぎるのは望ましくないで、その辺りのバランスを見極めるのは思い入れのある人ほど難しいことだと思います。

中澤 ありがとうございます。今度は中村先生、何か困ったことや留意すべき点はありましたか。

中村 今おっしゃったことに引き付けて言うと、思い入れが強くなり過ぎてというところで、なるほどと思いました。SA をお願いする側の教員としては、SA 業務とご自身の研究・学習とのバランスに配慮して、業務が過度の負担にならないように留意する必要がありますそうですね。

中澤 ちなみに、「SA の八尾さんです」と受講生に紹介する時に、中村先生は「元受講生です」ということも付け加えているのですよね。

中村 はい、そういった紹介をしています。意図としては、もちろん過度の負担にはならないようにという前提ですけれども、教員だけでなく SA さんにも積極的に質問したり、困っていることを相談したりしていいんだよという雰囲気を作りたいためです。また、先程いったように、ある種のロールモデルとして捉えてほしいということもあるので、「元受講生です」というのは積極的に紹介しています。

中澤 特に授業を支援する学生スタッフの研究ですと、教員が学生スタッフにロールモデルになってほしいと求めることが言及されているので、まさにその話だなと聞いていて思いました。

中村 そういった研究があるのですね。面白い。

中澤 そうなんです。思い入れが強くなるということも、すごく分かるなと思いました。やはり元受講生には授業のゴールが見えているので、SA として学生がやっているのを見ている時に、これがいい、悪いというのが判断しやすいと思うのです。そうすると、もっとこうすればいいのに…といったことがあったとしても、そこは授業の様子を見ながら SA として適度な関わり方をするというのは確かに難しいのかもしれないなと聞いていて思いました。

※中略部分や続きを含めた全編については部門 web サイト (https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/classes/class-report/casebook_semi_interview2/) から是非ご覧ください。

◆ ジグソー法を授業で活用する

ジグソー法というアクティブラーニング手法を聞かれたことがある方も多いのではないのでしょうか。ジグソー法の核である“異なる部分を組み合わせる”という枠組みは、授業の様々な場面で援用できます。ここでは、授業での実践例を挙げながら、ジグソー法の授業での活用についてご紹介します。

ジグソー法の基本的なやり方

ジグソー法は、「あるトピックやテーマについて複数の視点で書かれた資料をグループに分かれて読み、自分なりに納得できた範囲で説明を作って他の人とその情報を交換し、交換した知識を統合してテーマ全体の理解を構築する手法」（『+15』 p.34）です。

一般的なジグソー法のやり方は次のとおりです。

- ① 教員が複数のテーマや資料を提示する
- ② 学生は担当する資料を決める

